

< 研究ノート > 一種の原初形態における生命信仰

著者	張 明遠
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	6
ページ	170-177
発行年	1992-09-30
その他のタイトル	<Notes>The Cult of Life in an Ancient Form
URL	http://hdl.handle.net/2241/14262

研究ノート

一種の原初形態における生命信仰

張 明遠*

魂が肉体から離脱することができた時、最初の宗教観念が誕生する。これは人類学、宗教学において最も多く広まっている捉え方の一つである。かつて宗教研究に多大な影響をもたらした万物有霊論はまさにこの考え方の典型的代表である。今日まで宗教観念の起源形態に関して様々な議論が繰り返されてきたが、このような結論は疑問を抱かれたことがないようである——魂は肉体から離脱すると、もう再び死ぬことはなくなり、魂が一種の自然の生命形態を超越することによって、人々が崇拜する対象となる。しかし、一種の原初形態の靈魂観は我々にとっても貴重で重要な事実を提供してくれる。この事実は我々にこう伝えている——魂にも死は存在する。一切のもの全てに死は存在すると。これこそ初初生命信仰である。

1. 靈魂死亡観

この貴重な事実は独龍族の民間信仰が我々に与えてくれたものである。

独龍族はその数約4600人余りの中国最少の民族の一つである。雲南省貢山独龍族怒族自治県内に分布し、主として独龍江兩岸に居住している。その地は険阻な山地であり、交通も不便な上、一年の内半分を大雪が山を封じている為、内地との往来が非常に少ない。彼らの農業生産方式は粗放な焼き畑という段階であり、漁獵と採集が生活経済を占める比重が重い。解放の前までその社会形態は父系制度に基づいており、人民公社によって次第に崩壊していった。長期にわたる原始生産方式と社会生活の中、独龍族は靈魂観を留保してきたのである。

*中国・人民大学中文系助教

この靈魂観では人や動物など生命を有する一切の生物は靈魂を備えており、また、人々の生産生活と密接な関係のある無生物も靈魂を持つものとされている。明らかにこの靈魂観は汎靈信仰の上にあるものである。

しかし独龍族の信ずる靈魂は一つではなく二つなのである。各人間、動物には前後して二つの靈魂があり、一つは「ブラ」と呼ばれ、もう一つは「アシ」と呼ばれている。「ブラ」は生物生存の靈魂を支配する、即ち、生前の靈魂であり、「アシ」は死後の靈魂を意味する。二つの靈魂において互いに内在する関係はなにもない。

人、動物の生前の靈魂——ブラは具象のものであり、抽象のものではない。人のブラを例にあげると、各人のブラは全て人の個性特徴に一致し、人の体格、容貌等外部の特徴から、性質、性格、智恵等内面的特徴まで、その本人のブラとそっくりそのままであり、人が服を着替えたとする、するとその度にそのブラもまた同様着替えてしまうのである。非常に明らかに、この靈魂形態は完全な幻想的レベルには達しておらず、また、人、動物の肉体形態から完璧に分離していない。独龍族の靈魂観は最も原始的の靈魂観を述べている。

当然、ブラがある種の靈魂形態を成しているとするならば肉体とある程度の分離関係をも構成しているはずである。ブラは主に二種の状況の下で肉体と分離するとされている。

その状況の内一つはまず睡眠時である。独龍族の者は人々が眠ろうとしている時、ブラは眠りを必要とせず、人々が眠っている間ブラは常に人の肉体から分離して活動しており、ブラが外部において行動した全てのものが、人々の夢の世界を構成していると考えている。

もう一つは死亡時である。彼らはブラが先に死ぬことによって、人も必然的にブラと共に死んでしまうと捉えているのである。いうなればブラが完全に肉体から分離してしまえば人は必然的に死に至るということである。肉体から離脱したブラは再び生まれ変わるわけではなく、また靈魂の世界へいくのでもなく、永遠に消えうせ、人同様死んでしまうのである。明らかにブラは生存の靈魂を支配しており、又、生命と共に存在し消滅するものである。

これによって類推すると、動物の死も人間の死と同様、ブラの死によるものということになる。その動物の死が、たとえ病死であろうと、捕殺によるものであろうと、死の原因は彼らのブラの死によるものなのであり、狩人又はその他の傷害によるものではない。動物のブラも死後は再生せず、永久に消滅してしまうのである。

人間と動物の死後は別の靈魂によって支配されることになる。この靈魂を“アシ”という。アシは死後の靈魂ではあるが、その存在形態はブラよりも特別なものを備えているというわけではなく、アシもまた具象のものであり、形状も有すれば性格もある。人を例とすれば各人の第二の靈魂の形状、性格は各人生前のそれと同様の物である。されど、我々が最も注目すべき点はアシが既に死後の靈魂を意味しているものにもかかわらず、結局はアシにも死があるということだ。

独龍族はこのように捉えている。アシには靈魂世界があり、各人のアシがそこに存在する時間は人の生前の寿命期間に相当し、その世界は「アシムリ」と呼ばれており、実際には人間の模写世界のようなものである。アシらは生前所在する氏族又は家族を単位として共に生活し、ただ異なるのは生前に嫁いだ女性だけである。彼女達のアシはその母親の氏族、家族の所に帰って生活する。アシらにも農作業、採集、漁獲、狩猟、織物など生産活動があり、その上、社会生活もある。アシは生前の村に集落を作って住み、アシの首領が集落の総務を管理し、もめごとを解決したり、生前の行いの悪いアシには習慣法に基づいて懲罰を執行

する。つまり各人が生前至る所で、経験したことを、そのアシも同じく一通り経験するのだ。そして最後に寿命がつきると同時にアシは色とりどりの蝶に変身する。色どり豊かな蝶は女性のアシが、白い蝶は男性のアシが変身したものである。アシの変身した蝶はこれといった特殊性もなく、単なる普通の蝶である。そして蝶が死ぬと、靈魂形態は何一つとして存在しなくなるのである。

独龍族の靈魂観念から我々が認識したことは、このような初歩形態の靈魂信仰はわずかに靈魂と生命の一定の分離を作りあげているものの、その超越性にはまだいま一つ足りないようである。

まず一に、生命の靈魂形態が生命の存在形態に対し超越性がなく、靈魂は外面から内包まで生命の形態と同様であるという点である。

次に、靈魂世界が現実社会に対しても超越が見られず、靈魂の靈魂世界における境遇と現実世界のそれとが同様という点だ。

見るに、独龍族は靈魂世界に対して過大な望みはもっていないようである。このような靈魂世界において、靈魂は永久不変のものでなく、そして現世よりも素晴らしい待遇をうけられるというのではない。この靈魂が人々にもたらす最大の希望とはただ人の寿命と生活を重複させることであり、人々に改めてすでに送った人生を再度与えるだけなのである。それから、最初の靈魂観から靈魂不死の観念に至るまでこの中間にまだもう一つの過渡が存在するということは、人々の宗教観念における早期形態の発生と発展の過程に対して、より具体的により精細に認識するのに貢献した。

2. 生命保持は輪廻より重い

新事実の出現は往々にして人々の既にある認識を更新させる。宗教研究もまた絶え間ない新事実の発見、絶え間ない旧知識の更新の過程の中、一歩一歩と研究を深め発展し今日に至るのである。今、私達の前に置かれている事実も私達に改めて懸案を認識させたものである。例えば一種普遍的見方では全ての宗教は死後の世界への関心を起

源とし、とりわけ靈魂世界の存在後は人々が主要な宗教関心を靈魂世界に投げかけるように魅了した。この見方はすでに常識的な結論となっているが、しかし、独龍族の靈魂世界に直面すると、我々は疑問を抱かずにはいられない。このような靈魂世界は人々に対し果たしてどれだけの魅惑力があるのだろうか？

今日、おそらく、宗教観念の発生が原始人の想像の欲望や浪漫主義の衝動によるものなどと思う者はありえないだろう。確かに実用目的のない(あるいは更に適切に言えば極めて高度な実用目的のない)想像は宗教史上においてすでに見られている。宗教史の幾多の事実は我々にこう伝えている。宗教の発展が低級階級であればあるほど、人々の宗教に対する実用性の要求も高くなるのだと。

事実を表明すると、独龍族が考えていない靈魂世界は彼ら自身にとって確かに大きな吸引力はないという。彼ら曰く「死人は亡霊ではなく、別の場所に住む‘アシ’であり、‘シ’もまた人なのだ。」(蔡家麒《独龍族の亡霊観念》掲載《中国少数民族宗教》雲南人民出版社1985年)見たところ、独龍族の生活、観念に対し二つの靈魂の持つ影響力は決して大きなものではなく、また、死後の靈魂世界が独龍族の宗教生活の主宰者となることもなく、人々の観念においては生前に対する関心の方が死後への関心よりはるかに強いと言える。よって、独龍族は完璧なまでに人間とよく似た靈魂世界を作りあげているのである。そしてまた、人々の靈魂に対する態度からも、独龍族の関心の偏重点を見ることができる。

独龍族と漢族とでは靈魂に対する態度がはっきり異なっている。独龍族は靈魂が人の後世に対し、幸福、加護の働きがあるとは考えていない。逆に靈魂(アシ)は常に人や家畜に悪影響を及ぼし、酒、肉を貪食するものなのである。よって、人々は靈魂に対し少しも崇敬の心はなく、独龍族の観念には家族又は氏族の祖先崇拜の要素は存在しない。人々は靈魂に対し恐怖、嫌悪しか抱いておらず、永遠にアシらとの関係を断ち切ることを望んでいるのである。特に人の死後のある期間中は死

去した亡魂が人間にとどまって、崇ったりしないように、家中の人は再三墓地に向かって祈求する、「ここはおまへのいる所じゃないんだ。酒と飯を持ってはやくどこかへ行っておくれ。」できるだけ速く亡魂をあしらって、早くその行くべき場所に着いてくれることを願う。人々の亡魂に対するこのような態度は人々がアシという靈魂世界を作りあげたのだ、と我々が考えることを禁じているのではない。その目的とは亡魂にある隔離的場所を作って与えるということであり、ある理想世界を作りあげるということではないのである。

死者が生者に危害を加えるのを恐れる、まさにこのような危機感が死者の安らげる靈魂世界を人々に作らせたのである。人々が死者との関係を永遠に断絶することを願うため、供養をし死者の亡霊をアシムリに行かせた後は2度と祭祀を行うことはない。以後もしアシが戻ってきて悪行をはたらくようなことがあれば、すぐに祈禱師にまじないをしてもらい追い帰す。

この時期の人々の宗教に対する希求は生命保持は輪廻より重要、生前は死後よりも重要ということである。

3. 恐怖の妖怪世界

恐怖とは人類に宗教の必要性を生じさせた重要な原因の一つである。独龍族における原初形態の宗教観念から見ると、この時の人々の死亡(正常な死亡を指す)に対する恐怖とは、最大の恐怖というわけではなかった。正常な死後の靈魂アシは確かに悪影響を及ぼすが、これらの悪行の危害はとても小さなものだと言え、人々は捉えていた。このことは人々にとって死とは最大の脅威ではなく、それは思いもよらぬ傷害、疾病や災害であった。これらの傷害、疾病、災害に悩まされ、独龍族は一種別の靈魂世界を創りあげた。即ち亡霊の世界、妖怪の世界である。

独龍族は恐怖主義を核心とした万物有霊観を持ち、彼等が最も不安に感じていたのは、人は様々な目に見えない幽霊(適切には妖怪と呼ぶべきで

ある)に取り囲まれた世界に生活しているということであった。幽霊は地上にもそして天上にも存在し、人はその姿を見ることはできないが、幽霊は人を見ることができ、よって人々は幽霊の侵害を防ぎたくても、防ぎようがないのである。幽霊は二種に分けられ、主として悪事をなし、天上に住むものは「ナンム」といい、人々の疾病を癒す助けをすることができるが、しかし人を殺害するものである。人々が主として恐れた幽霊は地上のプランであり、独龍族の観念ではプランも人と同様、繁殖もすれば死にもする。家族もあれば、また二つの靈魂——ブラとアシも持っている。彼らは主に人、家畜のブラに対し悪影響を及ぼし、幽霊と人のアシとが悪行をなす目的は同一のもので、その目的とは食物をこい求めることである。幽霊の形態と非常に似ており、これは人が自身をモデルとして幽霊を創りあげたため、そのなす悪事の目的までもが同じものということになるのだが、幽霊の加害力は人のアシよりも大変大きなものなのである。次にいくつかの主な幽霊を見てみよう。彼等の働きについて理解することができるはずである。

人々が最も恐れ、人を悩ます亡霊とは、まず崖、洞窟に住むとされる「ジプラン」がいる。ジプランは様々なモノに変身するのが巧みであり、人の体に近づいて、人のブラに対し悪行をなし、人に大病を患わせ、死亡させてしまうという、人への危害が最も大きいものである。

“クジャンプラン”又の名を“ガスン”という。河辺の岩壁に住み、到る所に彼等は現われ、人々は彼らにぶつかると、急性腹痛症状の病気にかかってしまうのである。

“ナンムラン”はどこでも飛び交っている崖峰のように、主に肺病を流行らせる幽霊である。

“ルイプラン”はハンセン病を伝染させる幽霊。

“ガムプラン”は人々に発熱、頭痛、嘔吐をもたらす幽霊である。

“ブラプラン”は昆虫又は若草のような形状で、人が食事に口を開けた時に人体に入りこんで悪事を働く。

“モリ”は山林に住む幽霊で、夜にうなり風を立てる。人が山でたき木、又は開墾時に野草を焼き払っている時などにその傷害を受け、全身に腫れもののできたりする。

またその他たくさんの幽霊が人々に思いもよらぬ傷害をもたらす。これらの幽霊は総称して“タグラプラン”といい、多数の幽霊を含む。

“シンダグラ”は山の木によって人を圧迫死させ、

“ロンダグラ”は落石によって人を殺し、

“アンタグラ”は人を河に落とし溺死あるいは飛び込み自殺をさせる。

この外に普通毒蚊にさされ死ぬ者や、刃物で過失傷害をおこし死に到る者など、これら突如としてやってくる災禍は、皆多くはこの一類の幽霊が原因と考えている。

“ムロンプラン”俗称道の幽霊は、よく山道を徘徊し、道を行く者が彼等につつかると、足を踏みはずし、転んでしまう。

“アランガプラン”は夜至る所でぶらぶらして、大声で叫ぶ。人を連れ去る畜類の靈魂ブラの幽霊。

“カムルプラン”は家屋を失火する幽霊である。

これら人を悩ます亡霊のもたらす作用から見ると、彼らは実際のところ様々な病気、思いがけない傷害、不慮の死の化身に生活しているようだ。悪環境や生産条件の遅れのため、人々は生産活動中常に突然の事故など不慮の災禍の脅威の下にあり、又、独龍族社会において、医療状況が著しく遅れているため、人々の健康はいつも様々な病気の脅威の中にある。それでこれら人々の生命の傷害や病気などの脅威がまず人々の恐怖の対象となり、続いて人々の崇拜の対象となって、それにより様々な亡霊域は妖怪へと変化していったのである。

このような推論は、相当程度としてはまだ論理的推論にすぎない。さらに具体的結論に至るには実証の手段を用いるしか、他に方法はないようである。例えば独龍族の創り上げたこれら人を悩ます亡霊とは、傷害や病気などから抽象的に変化したものなのだろうか？それともある特定の対

象から具象的に変化してきたものなのだろうか？この問題は、原初の超自然形態の霊魂（亡霊、妖怪）はどのような原理を用いて創造されたのかということに関係してくる。よって、少しも疑問がないということは、最も重要な根本的問題なのである。

もし独龍族の霊魂創造と亡霊の創造もしくは妖怪の創造が同一の原理からなるものだとするならば、前文で紹介した人の霊魂形態において、我々は霊魂創造の原理を見出すことができるはずである。この創造原理はとても簡単で、とてもストレートなそれはまさに人の原型に基づいて霊魂を想定したものなのである。これによって推測するにもし同一原理を用い、亡霊、妖怪を創造したのだとしたら、その原型とは一体何であろうか？

前文で既に述べたように悪霊ブランは繁殖もするしまた死にもする、家族、氏族もあれば二つの霊魂も有する。このように照らしあわせて見ると、その原型もやはり人ということになる。この点は比較的明確なようだ、しかし、次々と現れる問題は極普通の人が亡霊或いは妖怪の原型となることができるのか、それともある種特殊な人だけになれるのか？ということである。

現有する資料の中から、我々はこのような亡霊、妖怪の来歴に関する伝説を発見した。ここで下記の通り略述する。

ジブランの伝説

ある時、5人の者が山へ狩りに行った。その内4人は崖下で行く手を遮られてしまったが、残りの一人は猟犬を連れ崖に沿って野獣を追いかけた。ほどなくして、崖のうえで犬が吠えたので、4人が行って見てみると、その男と犬の姿はどこにもない。すると今度は崖の下で犬が吠えたので、下りて行って見ると、やはり男と犬の足どりはない。翌日大勢の者が崖を捜したが、耳にしたのは「おれはジブランだ。おれは狩人だったのさ。」という声だけであった。そしてその声は続けて人々に語った。「これからもしも病気になったら俺の所に米と酒を奉納するんだ。」人々にはその

話声しか聞こえず、その姿を見ることはできなかった。この時から独龍族は崖の幽霊ジブランを祭り始めた。なぜならば、ジブランの人に対する危害が一番大きいからだ。

ジブランは独龍族が最も恐れる悪霊で、ひどい時などもっばらジブランとこれら一連の悪霊に対処する祈禱師がいた程である。ジブラン来歴の伝説から、伝説中の失踪した狩人はどうやら崖から転落し死亡したようであるが、その死体を捜し出すことができなかったため、人々は狩人が幽霊となったのだと考えたと、我々は見ることが出来る。これは独龍族の亡霊創造の原理を含んでおり、亡霊とは事故に遭ったが、その死体を残さない人になったものなのだ。この幽霊創造の原理は事故に遭い死んだ者でさえ別の者に災難をもたらすことができる人と人々が捉えていることを表している。この観念は独龍族の葬儀習俗において具現されている。独龍族は普通土葬であるが、死因が流行性急性伝染病の者に対しては火葬しなければならず、なぜならば、このような者のアシは最も恐ろしく、誰かれかまわず同じように疫病にかけ死なせてしまうからである。よって、死者もその衣服も全て燃やし、燃やす時は何度も何度も向きを変え、完全に焼きつくすのである。これでやっと死者が戻ってきて悪事をなすのを免れることができるのだ。よって、山中などで災難に遭った者に関しては、人々は彼らの死体を捜して来て火葬することができないので、彼らが悪霊となって、しばし戻ってきて悪さをしても、させるがままにするしかないのである。

独龍族はこのようなたくさんの悪霊に取り囲まれた恐怖の世界に生活している。独龍族の宗教とは、これらの悪霊をとり払うための宗教だということができよう。

4. 原初霊魂観の宗教概念

独龍族の原始宗教は我々に原初形態の霊魂信仰を示してくれた。この霊魂信仰は我々が初期形態

の宗教現象を改めて認識，理解することに対し，又，我々が初期形態の宗教に関する現有の理論を改めて見つめなおすことに対し，大変役立つものである。

まず，この靈魂信仰が再生主義の宗教需要を表しているということだ。

この段階の靈魂信仰においては，まだ靈魂不滅の観念は生まれていない。人々が切実に関心を寄せている問題は死後の靈魂の運命ではなく，自身の生命なのである。人々が解決を急ぎ求めているものは，どのように疫病に打ち勝つか，どのように災難に打ち勝つかという，生命保全の問題だったのだ。独龍族の宗教にはトーテム崇拜，祖先崇拜というような社会性の宗教は見られず，生産活動に関する宗教もまだ萌芽状態であり，人々はただばく然と自身の靈魂観から，悪霊達は人と同様食物を食べることを必要とするため，人の靈魂又農作物の靈魂に対し悪行をはたらかずにはいられないのだと考えていた。この他，狩猟活動の際には一人の狩人が変化した“レンムーター”という悪霊が野獣の靈魂を管理していると考え，狩猟に行く時は常にレンムーターを祭るのであった。独龍族の宗教生活は彼らの宗教の需要が社会生活方面，生産活動の点にあるのではなく，主に人の生命そのものにあることを示している。独龍族の靈魂主義信仰観念における圧倒的部分の亡霊，妖怪又人の靈魂は，全て人の身体，生命と関係があることが見てとれる。独龍族の祈禱師の主要な仕事は亡霊を追い払い，病を治すことであった。

人々は疾病など災難が起きた時ばかりでなく，常に病気を治し生命を保持することを求めている。よって普段から生命保持，延寿のための亡霊を祭る儀式を行っていた。独龍族の生命保持延寿の儀式は主として“スーラーチャオ”と“ムースオヤ”とがある。

スーラーチャオは男性の生命保持延寿の儀式であり，儀式の祭祀の対象は男性の生命を最も脅かす一群の亡霊で，これらの亡霊は総称して“スーラーブラン”と呼ばれる。儀式中主祭者の祈禱の言葉は人々の願いをしっかりと表している。主祭

者はスーラーブランに祈禱する「スーラー，スーラー，あなたの好きな物を今日私達はすべて差しあげます。ですからどうぞこの者に危害を加えないで下さい。彼のブラが苦しめられることなく生き，そして長寿であって，白髪になるまで生きることが出来ますように！」。スーラーチャオの儀式は過去常に行われていた。

ムースオヤは女性の生命保持延寿の儀式である。一生のうち三度行われる。一度目は幼女時，一，二才で行われ，主として，ナンムーとブランに幼女のか弱い靈魂をそっとしておいてくれと祈る。二度目は嫁いだ後初めて実家に戻る時に行われ，夫の氏族の靈魂が彼女に着いて実家の氏族にやって来て，人に危害を加えるのを防ぐためである。三度目は老年期で最大の亡霊ガーマンとムーベイボンの祭祀を行う。彼らに自分のブラを食べないで，そしてブラに少しでも長く生かして下さいと祈るのである。

様々な形跡は疾病に打ち勝つ，災難を防ぐ，生命を持つ，延寿する，これらこそ，独龍族の基本的宗教需要であることを明らかに示している。

次に独龍族の靈魂信仰は恐怖主義の宗教心理を反映している。

独龍族の宗教心理は恐怖主義であり，彼等は自ら創造した宗教の対象に対して畏敬の心すらないのである。尊敬，信頼そしてよりよりどころとするなど更に言うまでもあるまい。あらゆる亡霊，妖怪又人の死後の靈魂は全て人と対立の位置にあり，独龍族にとって，信じ頼ることのできるのはいはり人類そのものしかないのである——自身，家族，一族の者，特に祈禱師の“ナンムーサー”と“ウー”。独龍族の宗教世界において，悪霊ブランなどの最も大きな敵対力となるものを除いて，その他いくらかの妖怪は善と悪の間にある。例えばある一類の“ナンムー”という妖怪がいて，その性質は神と亡霊との間にある。おそらく宗教観念の進化において後から生まれた要素であろう。しかし，ナンムーであろうとやはりしばしば人に悪行をはたらく。しかも独龍族の観念において人類を加護することを主要な責任とする超自然

形象はまだ存在しない。独龍族の宗教観は、汎神信仰から隔たことはまだまだ大きい。

つまり、恐怖主義を心理基盤とする独龍族の宗教世界観では、聖と俗という二大世界が完全な対立状態にあり、霊界の多くの亡霊、妖怪は直接交流でき、この交流こそ人間界に危害をもたらすことを意味しているのである。人類の多数は霊界と交流することはできないが、ごくわずかな者だけが代表となって交流することができ、それができるのは祈禱師と族中の高位者で、人類と霊界の交流は主に対立を除去するためのものである。独龍族の観念において、各種の妖怪特に亡霊たちは皆非常に貪婪である。絶えず人、家畜に悪事をなし、人から供物をとり立てて、亡霊が人に要求する供物は全て食品だからだ。おかしいのは亡霊はむさぼり食べるばかりでなく、とても貪欲だということだ。人が亡霊を供養する時、かならず祈禱師もしくは経験のある者に繰り返し占ってもらう。どの亡霊の仕業か、又その亡霊にどのような食物を献上したらいいか、どのぐらい必要かなどを見てもらい、亡霊のとり立てに基づいて食品を奉納する。亡霊の危害は人を恐がらせ、亡霊の行動もまた人をひやかさせる。独龍族は常に恐怖そしてひやかしのどうにもしようがない宗教心理にあるようだ。

次に、独龍族の汎霊信仰は有限の汎霊主義を表している。

汎霊信仰は通常万物有霊観といわれ、万物有霊論の主張者達の普遍的意見に基づく、万物有霊観はすべての自然界の各種動物、植物や無生物はみな人と同様霊魂を持つと考えなくてはならない。しかし、独龍族の汎霊信仰の対象物は自然万物を含むものではなく、人の生存を最も密接に関連をもつ数類の限られたものをわずかに含むものだ。

まずは、人自身に霊魂があるということだ、人が自分に霊魂があると信じて始めてこそ、他物のことを推し量り、外の物にも霊魂があると信じることができるのである。何の疑いもなく、人そのものの霊魂観が汎霊主義に必要な前提条件であ

る。

続いて、人は自身が遭遇した疾病、傷害を亡霊と想像し、亡霊にも霊魂があると考えている。

また、動物にも普遍的に霊魂があり、特に家畜、家禽にも霊魂があると思っている。野獣もほとんどが霊魂を持つ、なぜならば、野獣は人の獲物となるからである。

その外、動物の霊魂観と比べ、植物の霊魂観はぐっとその発展性がなくなる。植物では独龍族は主として穀物に霊魂があると考えている——“グーフン”。その他生産や生活と無関係の植物は汎霊観の中には存在しない。無生命の自然物に至っては、それらが汎霊信仰に入り込むことはほとんどない。

総括的に述べると、独龍族の汎霊観は“汎”などというのではなく、“万”物有霊までなどといったらその隔たりはさらに大きくなってしまふ。これは汎霊信仰がつかみどころのない幻想の物などということは決してなく、また原始社会の人の好奇心や想像欲などの産物でも絶対がないことを示している。実際、このような極めて悪い生存環境では、人々になんら空想の余地を与えることなどもともと不可能のことなのである。例えば人間世界にとって破壊性をもつ自然力の中で、独龍族が最も恐れたものは人そのものの生命に対し脅威をもつ疾病や傷害である。よって、彼らの宗教観念において、疾病や傷害を代表する亡霊の観念が最も発達したのだ。また農作物に被害をもたらす自然力に対し、独龍族はそれ専門の人格化を加える亡霊の原因と同じであろうと簡単に理解したにすぎなかった。穀類を蝕む、虫、鳥、獣等はみな亡霊たちが変化したものだと考え、虫の怪、鳥の怪などを想像し付け加えることはなかった。この現象は深く考慮するに値する、原始社会の人々が自然力に想像を加えた傾向は、想像の衝動にかられたものではなく、自然力の脅威を受けてのものなのだ。よって、彼らは敵対するのに便利なように、対処するのに都合のいいようにしたのである。ここから我々は一つの道理を体得することができる。それは原始社会の人の切実な

利益や骨身にたえる苦しみをよく理解した上で、彼らの宗教想像を念入りに考察する、これは一つの原則でなくてはならない。

(文中の資料は大部分『独龙族社会歴史綜合考察報告』雲南省民族研究所編印、によった。)

新刊紹介

福田アジオ編 『中国江南の民俗文化—日中農耕文化の比較—』

田仲一成編 『東亜農村祭祀戲劇比較研究』

ともに3月発行からわかるように、文部省科学研究費国際学術研究報告書である。前者は日本側は日本語で、中国側は中国語で執筆し、要旨はその逆の言語で記されている。後者はすべて中国語で記され、日本語版は別に刊行されるようである。このような報告書の体裁一つをとっても合同調査の難しさがうかがえる。私は前者のグループの一員として参加したが、調査地入りする前から、中国側研究者と行動を共にすることの中で民俗の比較の視点と刺激を得ることができた。今後は、ますます生活文化レベルでの比較研究、つまりは比較民俗的な合同調査がおこなわれるようになるであろう。調査報告書という結果ではなく、合同調査はその経過のうちに成否がある。参加者自身が言うのも変だがこの両書はこの方面の合同調査の敲き台としても今後意味をもつことになるだろう。

前者の内容は、福田アジオ「江南農村の社会組織と生活空間」、尹成奎「浙江省の民俗生活に見られる空間概念」、小熊誠「姚村における宗族組織と祖先祭祀」、岩井宏美「鬮扇=唐箕の系譜」、張紫農「御院と中国南方の民俗比較」、佐野賢治「人生儀礼から見た江南の民俗」、巴莫曲布嫫「畚族の学師儀礼」、曾士才「畚族の命名法、成人儀礼、他界観」、何彬「麗水地区の葬墓制」、小林忠雄「民俗事象のなか

の色彩表徴」、張紫農「江南の年中行事と農耕信仰」、呉剛戟「方岩胡公神とその信仰」、周星「浙江省民間の建築儀礼」、陶立璠「年中行事と農耕儀礼の変遷—中日農耕民俗文化比較」、周星「泰山石敢当について」、小熊誠「石敢当小考」、劉鉄梁「江南農耕文化調査中の民間文芸」、白庚勝「江南地方の稲作起源伝承研究」、周正良「白茆郷の歌手調査」、史克「金華地方の婚礼歌謡の伝承とその変化」、朱秋楓「金華と沖縄の闘牛の比較研究」、矢放昭文「山根村畚族の言語とその環境」となっており、後者は田仲一成「論中国戲劇從宗教祭祀中産生的過程和環境」、毛禮鏐「明代五種儺神考」、大木康「安順地戲調査報告」、高倫「安順地戲前史論」、顧樸光「貴州少数民族的儺堂祭儀“過関煞”」、潘朝霖「思州古儺」、加藤徹「江南地方戲劇傳播北方或西方的途徑」、丸尾常喜「浙東目蓮戲札記」、諏訪春雄「日中兩國神靈憑依信仰の比較—日本の“憑坐”和中国的“尸”—」である。以上、書きながら、つくづく漢字文化圏の比較の必要性を思う次第である。

(佐野 賢治)

B 5 判 357頁 国立歴史民俗博物館刊

B 5 判 175頁 東京大学東洋文化研究所刊

1992年3月刊